



カメルーン東南部熱帯雨林の「混作畑」

1. 地域の概況

カメルーン東南部（コンゴ盆地の北西部）は半落葉性樹林帯が広がる地域である。ここには、キャッサバやプランテン（食用バナナ）を主作物とする焼畑移動耕作と、狩猟、漁労、採集などを組み合わせた複合的生業を営むいくつかの民族が暮らしている。



2. 畑の造成方法と作付体系

カメルーン東部州ブンバ＝ンゴゴ県の南、コンゴ共和国との国境近くに位置するモンディンディム村で行われた調査によると、この地域では乾期の始まる12月から2月に一次林、もしくは二次林を伐採し、焼畑を造成する。主な作物は主食であるキャッサバやプランテンの他、トウモロコシ、ラッカセイ、そしてヤムイモなどのイモ類である。作付様式は同時に多種の作物を列や畝なしに植えつける間作である。

図 カメルーン共和国東部州

3. 「混作畑」と生物多様性

この地域の焼畑の特徴は、焼畑造成時に伐採されない樹木や、除草を行わず畑地への侵入が許された多種類の野生植物が存在することである。小松・埴[2000]の調査によると、焼畑に設けた10m×10mの方形区には「伐採されない樹木」が27種43本、そして除草されない雑草62種が確認された。前者は、建材用(幹)・薬用(樹皮)・食用(葉に集まる幼虫や実・種)に利用される有用樹木がほとんどであった。後者についても、約8割に食用や薬用など何らかの用途が認められた。このようにこの地域の焼き畑は、栽培植物と野生植物の「混作畑」と呼べるものである。特に、伐採されない樹木が多数存在することは、陰性樹木の実生の発達を促進し、一次林構成種の多い森林が早く回復することに寄与している可能性がある。



プランテンを収穫する女性
出典：<http://www.africa.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/CameroonFS/>

「混作畑」では、管理の不徹底により、多数の野生植物の存在が許容されることで生物多様性が高まるとともに、人にとっての畑の有用性も高められていると考えられる。

出典：小松かおり・埴狼星．2000．許容される野生植物－カメルーン東南部熱帯林の混作文化．エコソフィア,6:120-134．